（別紙様式２－１）　　（県立高等学校・中学用）

熊本県立宇土中学校　令和元年度（2019年度）学校評価表

1　学校教育目標
熊本県教育委員会の「平成31年度県立中学校・高等学校における教育指導の重点」及び「平成31年度人権教育取組の方向」等を中心に据えながら、本校建学の精神である「質実剛健」のもと99年の伝統を継承しつつ、中高一貫教育校として新たな発展と創造をめざす。 全職員は教育者としての自覚と使命感、教育的愛情と人権感覚を持ち、資質と指導力の向上に努め、生徒一人ひとりの個性を伸ばしながら、知・徳・体の調和が取れ、自ら学び、自ら考え、自ら行動し、たくましく生きる力を備えた将来のリーダーとなる青年の育成に努める。 中高一貫教育校としての利点を生かし、効果的な教育のあり方を研究するとともに、地域との連携をより一層深め、地域に開かれた特色ある学校づくりに努める。

2　本年度の目標
①全職員が資質と指導力の向上及び授業改善に努め、生徒一人一人を理解しその個性を伸ばしながら、知･徳･体の調和が取れ、自ら学び考え行動する、逞しく生きる力を備えた将来のリーダーを育成する。 ②中高一貫の6年間及び高校3年間教育課程研究を推進し、宇土校ならではの教育活動を展開する。 ③地域の小中学校等との連携をより一層深め、学校の見える化を図り地域に開かれた学校づくりに努める。

3　自己評価総括表

評価項目 大項目	評価項目 小項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
学校経営	学校改革の推進	生徒一人一人と向き合う時間確保の工夫	校務の精選と業務時間（日課）の見直し	・校内連絡システム（Chat&Messenger）を活用して会議を削減する ・6限授業時の7限目相当時間帯を活用する	A	・校内連絡システムを活用して、素早く的確に情報共有し、会議の削減、縮減ができた。 ・7限目相当の時間に学習指導や面談等を継続的に行うなど、効果的な時間の活用ができた。
		生徒一人一人の特性を生かした活躍の場の設定	授業改革への取組とリーダー養成	・職員の少人数グループによる授業法の研鑽 ・体験活動「宇土未来探究講座」の効果的実施 ・生徒主体の中学集会の運営	A	・少人数授業や習熟度別指導により、個々の生徒の理解度に応じた学習指導の実践ができた。 ・綿密な計画、充実した事前研修を行い、生徒の主体性を高める体験活動ができた。 ・生徒会を中心に生徒主体の中学集会の企画、運営ができた。
	地域に開かれた特色ある学校づくり	地域への丁寧な情報発信	県立中学校入学者選抜における志願倍率２．０倍	・宇土中新聞を毎月発行し、小学校と地域に発信する ・年度当初から小学校訪問を実施する	A	・宇土中新聞を毎月発行し、小学校には持参、宇土市には回覧板を利用して発信した。 ・4月から毎月小学校を訪問し、顔の見える関係づくりができた。

学力向上	授業の充実と学習意欲の向上	全ての生徒が意欲的に授業に参加する授業の実践	生徒の理解度及び満足度90％以上の達成	・研究授業の改善 ・探究型授業の取組 ・ICT活用の推進 ・授業評価の充実（年2回）	A	・授業における生徒の満足度は、全体として90%を超えている。 ・探究型の授業をさらに深化させていく必要がある。
	自学力の育成	宅習時間の確保と定期考査の成績向上	・宅習時間の確保（宅習時間調査で、校内平均平日：90分以上、休日：150分以上）	・宅習時間調査の充実（年3回）	B	・宅習時間は、3学年平均で平日約75分、週末約140分とやや目標に達していない。
キャリア教育（進路指導）	6年間を見通したキャリア教育	望ましい勤労観・職業観の育成	将来の展望を持ち、夢の実現に向けて努力する態度の育成、進路講話等の満足度90％以上	・職業講話 ・現場体験 ・系統的な進路研究	A	・宇土未来探究講座でのキャリア教育は計画的に実施でき、充実していた。
		将来を見通したキャリア構想	職業を見据えた進路目標の設定度80％以上	・職業、大学入試に関する情報の提供 ・保護者会、二者面談、三者面談の実施 ・高校進路指導部との連携 ・3年次におけるパネルディスカッションの実施	B	・学活等で、職業に関する情報を提供したり、自分の適性を考えたりする時間をより多く設け、進路目標を明確にさせる。
生徒指導	基本的生活習慣の確立	服装・あいさつ・掃除の徹底	全職員による生徒指導と生徒に寄り添った配慮ある対応の実践、充実度90%以上	・全ての指導における「凡事徹底」の意識涵養 ・学年集会時の整容検査と事後指導の徹底 ・キャプテン・部長会によるあいさつ運動の実施	B	あいさつのできる生徒は増えている。もう少し相手に伝わる声の大きさの指導と意識の向上を図る。今後もあいさつ運動の充実を図る。
		交通ルールの遵守とマナーの向上	交通ルール遵守率90%以上、交通事故・苦情0件	・定期的な交通指導 ・啓発用のチラシの作成と掲示 ・交通安全教室の実施	B	交通ルール違反に関する指導はほとんどなかった。委員会活動を更に活性化し、生徒の自治能力を高められるようにする。
	自主性や社会性及び公共性を身につける	生徒会中心の行事の運営	生徒会主催の行事の企画・運営の充実、アンケートによる満足度90%以上	体育祭、文化祭、クラスマッチの見直しと、より一層の充実	A	生徒会を中心に行事を行うことでリーダー育成につなげることができた。多くの生徒が意欲的に参加できる行事を工夫・改善する。
		各種委員会活動の活性化	目標の明確化、生徒自ら動く委員会活動の実践、達成感90%以上	・生徒会執行部の主体による各種委員会の開催と合同会議の企画・立案 ・各種委員会の常時活動による活性化	B	各委員会の年間目標の達成や中学集会における委員会発表等にも力を注ぐことができた。各委員会同士で横の連携ができるような年間計画の作成を工夫する。

人権教育の推進	命を大切にする心を育む指導	生徒自身が自己を大切にし、他人を思いやり、いじめや差別を許さない態度の育成	人権意識、自尊感情の向上、自己肯定感90%以上	全教科・全領域において、教師はもちろん生徒相互間でも認め褒め励ます教育活動に取り組む	A	生徒は思いやりを持った発言や行動を心がけて生活している。約8割の生徒が自尊感情を持っている。
	職員研修の充実	人権教育の基本的認識の確認と実践力の向上	・職員研修の実践、校外の研修に全員参加、人権教育に関するレポートの作成 ・いじめや差別事象発生時において危機管理マニュアルを活用した迅速な対応	・教育実践の相互研鑽を行い、人権問題に関する深い認識と実践力を併せ持った教職員集団づくりに取り組む ・危機管理マニュアルの周知徹底を図る	A	校内外の研修参加により、人権教育の実践力向上につながった。また、普段から生徒に関する情報を共有し、いじめの未然防止や早期対応ができた。
特別支援教育	特別な支援を必要とする生徒への的確な対応	生徒の特性に合わせた支援	・生徒理解を踏まえた適切な支援の実践 ・個別の教育支援計画及び指導計画を基にした支援の充実 ・不登校傾向の生徒への支援と、カウンセラー室の効果的な活用	・特別な支援を要する生徒に対する全職員の共通理解を図り、環境整備に努める ・保護者やSC、SSWを始め外部専門機関とも協力・連携を図りながら、サポート会議やケース会議を開催するなど、組織的な支援を進める ・外部講師による職員研修を実施する	A	担任が作成した個別の支援計画及び指導計画を基に中学部職員で共通理解を図ることができた。不登校傾向生徒については、SCやSSWに定期的に面談をしていただきながら組織的な支援に努めている。
		ストレス反応を示す生徒への支援	・SCとの定期的な面談の実施 ・関係機関への引き継ぎ	・学校、家庭などの生活環境に起因するストレス反応を示す生徒をSCやSSWにつなぎ、ストレスへの対処方を学ばせる	A	心と体の振り返りシートなどを活用し早期にSCにつなぐことができた。2年にストレスマネジメント講話を実施し、対処法などについて学んだ。
いじめの防止等	いじめ防止委員会主導による啓発	いじめを未然に防ぐため、また無くすために必要な主体的な態度の育成	・人権意識、自尊感情の向上、いじめ0（いじめ解消率100%） ・いじめの早期発見早期対応	・いじめ防止通信を年6回発行する。いじめに関するアンケートを年2回実施。心のきずなを深める月間及び人権週間で人権作文等を読む。 ・いじめを早期に発見するためのアンケートを実施する	A	いじめ防止通信を高校と連携して発行した。毎月実施のきらりアンケートで生徒個人やクラスの状況を把握し、いじめの未然防止や早期発見につながる取組ができている。
	職員研修の充実	いじめに関する基本的認識の周知徹底と生徒理解力の向上	教職員が主体的にいじめ問題について考えることができる。アンケートへの回答100%	いじめに関するアンケートを分析した結果を共有することで、研修効果を高める	A	アンケート結果を中学部会で共有し、研修効果を高めることができた。

地域連携（コミュニティ・スクールなど）	地域に開かれた特色ある学校づくり	コミュニティスクール（総合型）への移行を図る	学校評議員会と学校運営協議会の統合・移行についてマスタープランの作成	・学校評価に関するアンケート結果の検証と対策 ・宇土市防災計画と本校役割との摺り合わせ ・総合型運営協議会への移行について、運営委員による具体的研究 ・評議員会・運営協議会への諮問	A	学校運営協議会については、（防災型）から（総合型）への緩やかな移行について研究を進め、宇土市と災害時の避難所利用に関する基本協定書を締結することができた。災害時対応マニュアル・家庭での防災教育について今後研究を進める。
			各種行事をとおした地域への参加率（連携率）の向上	・地域ボランティア・行事の広報と周知 ・参加に対する柔軟な対応	B	生徒の、地域行事へのボランティア参加意欲は高い。課題研究を通じた地域とのふれあいも進みつつある。
			HP・ブログの改善による配信の充実	・HPトップページのリデザイン ・ブログ入力方法の周知 ・見やすいHPへの改良	B	HPの見やすいデザイン、シンプルなアクセスという点ではまだ改善の余地がある。CMSの特性を生かしたデザイン及び更新方法を今後も研究する必要がある。
図書館活動	読書活動の活性化	図書館の利用者数の増加	1日当たりの図書館来館者数160人以上	・校内読書月間の実施 ・特設図書コーナーや展示の工夫 ・広報誌『らいぶらりいたいむず』の定期的発行 ・HPブログでの情報発信	A	1日あたりの図書館来館者数は183人で目標を達成した。『らいぶらりいたいむず』を8号、新着図書案内を15号発行し、HPブログに11回掲載し、読書推進に向けて取り組んだ。
SSH	第二期実践型、研究開発課題「未知なるものに挑むUTO-LOGICで切り拓く探究活動の実践」の構想具現化	UTO-LOGICを備えた人材育成の評価方法を開発する	生徒対象にL・O・G・I・C 5観点を問う学校独自問題「ロジック・アセスメント」の開発	2学期実施に向け、SSH推進委員を中心に教科と連携して開発する。ロジックルーブリック、LOGICガイドブックとの関連性も強化する	A	ルーブリック及びガイドブックの充実及び関連性の強化に対し、ロジックアセスメントの開発に要する時間確保が不十分であった。
			探究活動を評価するロジックルーブリック、ロジックチェックリスト開発	第一期に開発した評価をもとに研究開発を推進する。パフォーマンス評価を重視した評価方法を開発する	A	評価方法の研究が進められている反面、評価方法の共有や理解を図る機会や研究の設定が不十分であった。

	全校体制で展開する探究活動の実践及び探究の視点を授業に入れた、探究の「問い」を創る授業、教科の枠を越えた授業の実践	探究活動及び探究の「問い」を創る授業の実践の見える化”可視化”教科の枠を越えた授業の開発	職員の指導方法及び生徒の成果を可視化する機会を多く設定する。中学卒業研究との接続、連携を図る	職員研修・成果発表会実施、研究集発行、LOGICガイドブック開発、ロジック探究基礎、GS課題研究の開発。中学卒業研究と高校課題研究を連携する機会を設定する	A	探究活動の指導について全校体制で展開することができた。成果に対し、難しさを抱えている場面でのフォローアップの方法が課題である。
			探究の「問い」を創る授業、教科の枠を越える授業の実践を共有する機会を設定する	公開授業(夏:教科の枠を越える授業、冬：探究の「問い」を創る授業)及び職員研修(探究活動の指導方法)を実施する	A	各教科科目の授業設計や実践に関する情報交換する機会が増加した。成果に対し、学校内で授業研究する時間設定の困難さが課題であった。
中高一貫教育	宇土校ならではの中高一貫教育プログラムの充実	中高接続を踏まえたカリキュラム・マネジメントの実施	現在のカリキュラムの効果を検証し、次期学習指導要領を視野に入れた教育課程を研究する	教育課程研究委員会で具体的に検討する	B	本年度は具体的な取組までは至っていないが、現カリキュラムの課題等については議論を深めることができた。
		中高連携した学校行事・生徒会活動の充実	体育祭、文化祭等の合同行事における一体感の醸成と、満足度90%以上	・生徒会を中心とした行事の工夫と実践、全校集会の活用 ・保護者（PTA）と一体となった行事の工夫	A	・中高の生徒会で連携し、生徒主体の学校行事ができた。 ・学校行事の参加だけでなく普段の授業見学も保護者に依頼し、学校理解に努めた。

4　学校関係者評価

・私の校区としては網田中校区なのだが、宇土中の広報誌がここにもまわっていることに驚き、同時にうれしく感じた。
・生徒・保護者アンケート結果については、過年度比較を行い、適切な対策を行ってもらいたい。
・生徒会活動だけではなく、中高の合同活動やコミュニケーションをとる機会を増やした方がよい。
・地域との活動が少ないので、近隣の小中学校と連携し、PTAを含めた活動ができないだろうか。
・子供たちが喜んで学校にくる手立てを考えることは本当に難しいことだと思う。子供たちが、能力を伸ばしながら様々な取組をどのように克服していくか。小学校の子供たちを見ると、自分を大切にしながら力を伸ばしていくには、まだ物足りなさを感じていることなので、現在悩みながら考えているところである。
・アンケート結果からは、生徒、保護者ともにある程度の支持を得られていることがわかる。
・授業の進度を速めるなど、中高一貫のメリットをもっと生かした方がよいと思う。

5　総合評価

学校経営においては働き方改革を意識しながら学校改革を推進し、「宇土中新聞」等を発行して地域への情報発信を行うなど、地域に開かれた特色ある学校づくりが推進できた。学力向上については生徒の授業理解度、満足度が90%を上回るなど、授業改善に一定の成果が見られた。また、人権教育の推進と特別支援教育についても多様な課題や特性を持った生徒一人一人に対して、SCやSSW、保護者と連携しながら自己肯定感を高めることに努めた。具体的目標が27項目あるが、そのうち19項目でA、8項目でBとなった。全体の約7割がAとなる高い評価を得るなど、概ね目標を達成することができた。

6　次年度への課題・改善方策

自学力の育成に課題が残る。学びに対する意識の向上、授業と家庭学習の繋がり、将来を見据えた進路指導などを充実させて主体的な学びができるよう仕掛けをしていく。また、生徒指導について、生徒たちが自らあいさつや掃除を行うように動機付けしているが十分ではない。交通ルール遵守についても同様である。引き続き「凡事徹底」を意識させながら粘り強く取り組んでいく。次年度も生徒一人一人に寄り添いながら、保護者、SC、SSW等の方々と連携を深め、計画的、組織的に生徒理解に努めていく。